

No.117

2022年3月16日

公益社团法人日本山岳会富山支部

全国山岳古道調査(日本山岳会120周年記念事業)の進捗と今後の予定

この調査の概要については昨年発行の当支部会報でお知らせしましたので、重複する部分もありますが、その後の進捗及び今後の予定について報告します。

調査対象路線については、昨年5月、本部においてに第一次調査対象として59路線が選ばれ、 富山県関係では、「立山参詣道」「信越連帯新道」「有峰への道から薬師岳参拝道」の3路線が第 一次調査対象となったことは既にお知らせした通りですが、有峰と薬師岳関係の古道については、 その後、現地の状況から踏査困難と判断してその旨本部に申し出、対象路線から外れました。しか し本部としては、薬師岳・有峰の古道のように、踏査・復活することは困難であっても、歴史・文 化的に重要な古道は120路線の番外として取り上げ、コラムのような形で最終報告に盛り込む方針 のようです。本部においては、この2月を目処に残る調査対象路線を選定し、全120路線を決定す る予定で、富山支部から推薦している五箇山から飛騨への道(羽根道)が追加して調査対象になる 可能性があります。

富山支部としての取り組みですが、昨秋、立山登拝道の一部を踏査しました。具体的には、①立山駅から美女平、②天狗平から室堂、③室堂から雷鳥沢(一ノ越、立山三山、大走り分岐、大走り経由)を踏査し、岩峅寺から芦峅寺まで車で事前調査を行いました。

今年は、立山登拝道の残り(①岩峅寺から立山駅、②美女平から天狗平、③大走り分岐から真砂岳、別山、雷鳥沢)と、信越連帯新道の富山県側全線を踏査する予定です。立山温泉とザラ峠・松尾峠を経由するルートも一連の古道ですが、立山カルデラ内は現在立ち入りが規制されており、立ち入りが許されたとしても崩壊箇所があるなど安全上の問題があります。カルデラ内の古道については、文献や過去の踏査記録などを参考に、立山登拝道と信越連帯新道の一部として調査報告で言及するのが適当と考えています。

調査対象の二路線は、いずれも長大な古道であり、高標高の区間が長いので、高齢化した支部としては事前の情報収集や体調管理に万全を期して取り組む所存です。踏査は雪解けとともに開始し、本年度中に終えたいと考えていますので、各位の参加と協力をお願いします。また、ご意見、情報などいただければ幸いです。 (鍛冶哲郎 記)

	目		次		
全国山岳古道調査の進捗と今後の予定	鍛冶哲郎	1	山の雷は強烈である	佐伯郁夫	4
立山登拝道調査(室堂~雄山~真砂岳)	山田信明	2	コロナ禍の巣籠り閑話	近藤 晋	8
立山登拝道調査			会員動向•他		8
(千寿ケ原〜美女平〜ブナ坂)	金尾誠一	3	編集後記	北田幹夫	8
支部忘年会の報告	河合義則	3			

立山登拝道調査(室堂~雄山~富士の折立~大走り)

期日:2021年10月5日(火) 参加者:鍛治、松本、山田

日本山岳会の全国山岳古道調査の一次選定で富山支部の調査対象となった立山登拝道の現地調査が秋から開始された。当初この区間は、一の越山荘に泊り、雄山から真砂、別山、剱御前と2日間で巡る計画であったが、天気予報も見て日帰り山行となり、真砂手前から雷鳥沢におりてくることになった。

立山駅前の総合案内所には県民割引の切符を求める長蛇の列ができており、並んでいるうちに支部長、松本さんも到着。結局8:30乗車のケーブルまで待合室で待機することになった。室堂ターミナルで高瀬会員にあいさつ、草紅葉の室堂平を歩きだしたのは9:38になっていた。懺悔坂の祓堂で小休止、祠の裏側には廃材が積み上げてあった。一の越山荘前に到着。風が強くウインドブレーカーを着る。ここから雄山山頂まで、登山道沿いの一ノ越、二ノ越、三ノ越、四ノ越の各祠を写真に撮りGPSにも記録した。



今日歩くルートを眺めながら



富士の折立をめざす

すでに冬期閉鎖中の山頂社務所前で富士山を眺めながら昼食にする。すっかり冬支度された雄山神社峰本社(3003m)に参拝してから大汝山への縦走路を進む。大汝の避難小屋も9月28日で営業終了している。天気もよく登山者が多い。さらに富士の折立(2999m)へと進む。岩だらけのけわしい山頂では富士社跡らしき木札があり、黒部ダムと湖水がよく見え、閉まった内蔵助山荘を見下ろせた。急な下降を続けて真砂岳への鞍部に着き、風の当たらない内蔵助谷側で休憩する。谷間の雪渓はすっかりやせ細っている感じ。あとは真砂岳のトラバース道から大走りの下降。真正面に地獄谷を見下ろして下っていく。風が当たらなくなり暑くなる。下りきると錦秋の平となり、白いチングルマの羽毛が黄橙の絨毯の上にまき散らしたよう。キャンプ場のテントは数少ない。

賽の河原の六地蔵堂の前で小休止。祓堂のすぐ上あたりで懺悔坂の登山道と合流するこの神の道は丸太の階段が延々と続く。一の越への分岐を右折、逆光の玉殿岩屋を見ながら進む。室堂ターミナルに着いてから、マスクをつけ、クーポン券で急いで買い物をすませ 16:14 の臨時バスに乗る。結局真砂から別山、雷鳥沢の区間は2022年、チングルマの花の時期に持ち越された。(山田信明 記)〈コースタイム〉 9:38 室堂ターミナル~10:23 祓堂~10:37 一の越山荘~11:55 雄山山頂社務所~12:41 大汝山~13:04 富士の折立~13:29 真砂岳鞍部~13:45 大走り分岐~14:54 六地蔵~16:00 室堂ターミナル

立山登拝道調査 (千寿ケ原~美女平~ブナ坂)

期日:令和3年10月24日(日)参加者:鍛冶、渋谷、石原、金尾

「古道調査」には心惹かれ、加えて最近特に運動不足の身には優しいコースでもあり、久し振りの山行きに参加した。この日は天気予報に従い順延した狙いが的中の好天であった。集合地の立山駅は観光客や登山客で大賑わいであり、ケーブルカー乗車が2時間待ちとのことであった。予定を変更して材木坂から歩く。ゆっくり2時間かけて美女平に着く。駅舎向いの「出迎え杉、17番石仏」に詣でる。遊歩道に入り「森林浴の森・日本100選」に選ばれた一帯の外回りコースを進み、高原バス道路に出遭った所で昼食を摂る。あとはバス道路に沿って降り、中西悟堂命名の「愛鳥荘」や隣の「愛山荘」を通り、整備された「美女平公衆便所」を利用、見事な数々の立山杉を見ながら美女平駅まで歩いた。故河村さんと春山スキーに行き最後にこの道を歩いて下ったことがあり懐かしかった。ケーブルカーで下り、藤橋を渡って渋谷さんお勧めの道元禅師歌碑「立山の南無とからめし藤橋を踏みはずすなよ弥陀の浄土へ」を拝見した。日頃はバスで通り過ぎる箇所だが、気の置けない仲間と語りながら歩き、実に清々しい気持ちに満たされた一日であった。 (金尾誠一 記)





17番石仏

子育て杉

(コースタイム) 8:00 立山駅〜材木坂〜10:00 美女平〜美女平遊歩道外廻り〜アルペンルート車道〜ブナ坂〜愛鳥荘、愛山荘〜13:00 美女平〜立山ケーブルカー〜立山駅、道元禅師歌碑

支部忘年会の報告

令和3年12月15日に日本山岳会富山支部忘年会を富山電気ビルレストランで開催した。2年間このような会員の集まりはコロナ禍の収束が見られず開催ができなかったが、第5波と第6波の隙間を狙っての開催となった。出席者19名、会員近況報告が35名と久しぶりに会員との交流を深める機会となった。会場も密にならないように参加人数に対して大きい部屋を確保しても

らって、感染対策万全で対応していただいた。

コロナ禍による様々な影響が出ており、山へなかなか行けなくて自主トレーニングをしている とか、感染対策に気を使っているとか個々の大変な状況が話題となった。

この様な状況下でも元気な顔を見ながらの懇談は各会員にとってもいい気分転換になったのではないかという印象を受けた。全国の山小屋の対応の大変さに関する情報も入ってきており、やるせない気持ちが募るばかりである。参加者から山に関する情報提供や現状に対する意見等を紹介してもらい情報共有という形で意義深かった。

私からは9月28日に立山大観峰の展望台での出来事を紹介した。内容は静かな黒部峡谷に突然大音響が響いた。驚いたことにジェット戦闘機が下の廊下から黒部湖を縦断して上流へと飛行していた。多分米軍のジェット戦闘機と思われる。

こんなところを飛行していいのかと疑問を感じた。横田空域からは明らかに外れている。立山 連峰と後立山連峰に音が反射してものすごい爆音である。非常に危険な飛行と思われ、環境省や 防衛省はこのことを知っているのかという印象を持った。

コロナ禍で室堂平の散策者も少なかった。早く収束してほしいものである。 (河合義則 記)

山の雷は強烈である

落雷その1 広範囲の雷

私はこれまで何度も雷の恐ろしさを味わった。一番最後は 2004 年 7 月 27 日である。剱沢小屋に泊まって、これから何をするか考えあぐねていた時、写真仲間の田島富張(支部会報 No115「豪雪の山」9ページで T 氏となっている人物)から電話があった。池の谷乗越付近の岩屋の陰にテントを張って撮影に備えているので来ませんかという電話である。私は喜んで参加を OK する。別山尾根から剱岳頂上を越えて行くと、池の谷乗越近くにある岩の突起の下にテントを張って快適なねぐらをつくっていた。彼は稲葉英樹にボッカをたのんでたくさんの食料を荷上げしていたので、ありがたくお世話になる。

テントの前を若い女性二人連れが通る。「いい所にテント張っていますね」と言うので、「どこへ行くんですか」とたずねると、チンネ左稜線を登攀すると答える。仙台から来たと言って去っていった。午後4時頃急に空が暗くなり、そのうち雹や霰が降ってあたり一面まっ白になる。私たちは大急ぎでビニールシートを広げ大量に集める。これで熊の岩まで水を求めに行く労が省けた。焼け付く地面に落ちた白はたちまち溶けてしまった。7月にあたり一面白くなったのを見たのは生涯初めてであった。これと同じ現象が後に述べる松本深志高校の落雷事故でも発生する。

この雷は 30 分位であったが広範囲にわたった。立山黒部貫光(株)のロープウェイに落雷し 2 日間営業休止となり、シーズン真最中でありかなり混乱したと新聞は報じていた。後日いろいろ聞いたところによると早月尾根を下山中の稲葉君は持っていたストックのグリップにある鉄のネジ釘に落雷を受け、跳ね飛ばされたと言っていた。また早月小屋の屋根に落雷し穴があいたとも聞いている。ピッケル、ハーケンやハンマーなど鉄製の道具をたくさん持っていた仙台の女性クライマーは異常がなかったようである。標高約 2,800m の高さにいた私達も落雷を受けなかったのは幸運

であった。

落雷その2 ただ一発の雷

黒部川源流の鷲羽岳と高天原温泉を訪れたいという女性グループに乞われて私は案内を引き受けた。それは1999(平成11)年8月11日から6日間のトレッキングであった。妻をアシスタントとして二人で案内する。

8月11日 折立を出発し太郎平小屋泊、8月12日 黒部五郎小屋泊。

8月13日 黒部五郎小屋を出て鷲羽岳頂上に12時20分着。頂上で休んでいると雨模様になったので急いで小屋へ。13時5分三俣山荘着。激しい雨がたたきつけるように降ってきた。「この雨に遭わなくてよかったね」と2階でコーヒーを飲んでいたら、ガシャーンという凄まじい音で窓ガラスが揺れた。ただ一発の雷であった。

夕食前の乾燥室で「私の頭に雷が落ちたの」と幽霊のように立っている女性がいた。連れの女性が「見たわよ、この人の頭に稲妻が落ちたの。そばにいた男性は2メートルほど跳ね飛ばされたよ。」という。この日の雷はガラガラゴロゴロではない。誓ってただ一発、小屋を揺らしたあれだけである。信じられなかった。あの天地を揺るがせた雷の直撃を受けて生きているなんて。思わず足があるのかとおそるおそる見つめたほどである。私達よりわずか20分ほど遅れて、同じ鷲羽岳の尾根を下ってきた人たちである。もっと聞きたいと思ったが、聞くことさえはばかられるような不思議な空気をまとっていた。

8月14日 高天原山荘泊 その後大東新道を通って下山した。

今回の落雷は事故にはならなかった。直撃を受けたが雨具の表面の水を伝って地面へ放電したのである。彼女は新品のゴアテックス雨具を着用していた、それが幸運に結びついたとしか思えない。

松本深志高校の落雷遭難事故

落雷事故で最大のものは松本深志高校の西穂高岳独標におけるものであろう。高校生 11 名が即 死という痛ましいものであった。

長野県では山岳県として早くから学校の集団登山を行ってきた。同校でも昭和23年には30人用のテント、昭和24年からは八錐形の大型テント(昭和30年から2張り)を上高地小梨平に設営し、焼岳・西穂高岳登山のベースキャンプとしていた。それは学校主催ではなく郷友会単位や有志で行われていたという。昭和34年からは学校行事として学年登山が行われるようになり下記のとおり着実に実施された。

昭和34年 西穂高独標、徳本峠越え/野辺山高原、赤岳

- 35年 八方尾根、唐松岳/西穂高独標、徳本峠越え
- 36年 実施せず
- 37年 唐松岳
- 38年 大滝山、蝶ヶ岳、独標
- 39年 唐松岳/大滝山、蝶ヶ岳、独標
- 40年 唐松岳/大滝山、蝶ヶ岳
- 41年 針ノ木岳、蓮華岳/白馬岳
- 42年 針ノ木岳、蓮華岳/西穂高岳、徳本峠越え

上記のように西穂独標までは四度行っているが、昭和 42 年にはグレードアップして西穂高山頂

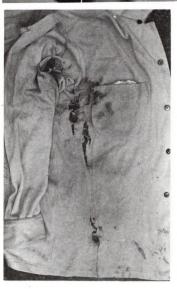
を目的地に選びエスカレーションしていった。独標と西穂山頂では技術的な面で大きな差がある。

















注1

日頃登山のためのトレーニングをしている山岳部の生徒ならまだしも、全く山の経験のない一般 の生徒を対象に計画すること自体間違いである。西穂高岳山頂まではなんとか登れたが、天候急変 に対応する余力は残っていなかったのだろう。 事故調査報告書(松本深志高校、昭和44年3月)には、登山そのものが慎重でなければならないように、計画も慎重でなければならないとあるが、計画段階でどれだけ慎重であったか。

小島六郎(日本山岳協会常務理事、山岳ジャーナリスト 注2)が著した『山の遭難』(昭和32年発行)及び山と渓谷172号には、昭和28年8月19日のスゴの頭の雷撃として克明に記されてある。それは大阪池田高校山岳部OB4名のパーティで、当時西京大学(現京都府立大学)の南 正さんが二番目を歩いていて落雷を受け3メートルほど飛ばされて即死した。この落雷事故については松本深志高校の報告書には『山の遭難』を読んだことがまったく出てこない。計画を慎重にするには多くの文献を読み、山の知識を習得しなければならない。当時『山の遭難』と山と渓谷の記事を読んでいなかったのは大きな落度といえる。

黒部五郎岳での遭難者

昭和28年の夏は、稀にみる悪天候であった。私は、その前年の昭和27年に穂高岳から立山への 縦走をしていた時、黒部五郎岳で濃いガスの中で道を失い北東方向への尾根に迷いこみ白骨化した 遺体を発見している。これは昭和15年の7月に猪谷から入山し行方不明になっていた第四高等学 校山岳部員野田震郎さん(金沢市茂里町三丁目)である。その後野田家からは遺体の収容を託され ている。(支部会報 No97 「黒部五郎岳の遭難」参照)

昭和 28 年夏にこの依頼を実行することにしていたのだが、この年の 3 月末に魚津高校の校舎が焼失したため、夏休みの前半に生徒全員火事場の片づけ作業をさせられ、山岳部の合宿は 8 月末になってしまった。同行の柴田君は現役のリーダーであり、8 月末から黒部五郎岳へ向かうことになっていた。前述のとおり 8 月 19 日スゴ小屋から五色ヶ原小屋へ向っていた 4 人パーティの南 正さんが落雷のため死亡。この事故は新聞やラジオで広く知れ渡っていた。私達は合宿のあと、黒部五郎岳に向かうため剱沢から雄山へ向かった。この日も天候が悪い日であり、スゴ乗越の落雷事故が頭をよぎり、18 歳の私は下山を決断した。

なお、この年の8月には石川県立桜ケ丘高校山岳部槙野和明さんが黒部五郎岳で野田さんと同じ 尾根で死亡している。落雷も考えられる。この遺体も翌年私が発見して桜ケ丘高校へ知らせている。 落雷の事故例をよく知るということは大切なことと言いたい。

おわりに

私の妻は鷲羽岳の雷の話をよくする。また、室堂平で傘をさしていて右手から右肩に抜ける電流を感じたことがあるという。心臓を通らなくてよかったと言っている。以来山で雨が降っても傘は使わない。また鷲羽岳では雷が雨具の外側を足元へ抜けたことから、雨具の内側に少しでも雨が滲みると新調することにしている。安全が金で買えるならと言って二年に一度くらいで新しいものを着るようにしている。心に留めていただいて何かの参考になれば幸いである。

- (注1) **長野県松本深志高等学校『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』(**昭和 44 年 3 月 10 日発行)の口絵写真から被害の状況を撮影した1ページ分をそのまま転載させていただいた。
- (注2) **小島六郎** 新潟県小出町出身。早稲田大学卒業。読売新聞社で記者生活を 10 年。終戦後は函館新聞 社専務、ベースボールマガジン社重役を歴任。大正 15 年早大山岳部時代に四谷龍胤と穂高の滝谷を初登攀。 私と井上晃、薬師義美、福本彰等と発行していた同人誌「山椒」6 号にも投稿いただいている(昭和 38 年 7 月発行)。

コロナ禍の巣籠り閑話



2022.3.9 尖山にて

先日友人から"どうしている"? 今日は 2022 年 2 月 22 日 (ニャンニャンの日) 次は 200 年後 2222 年 2 月 22 日、何の日になるだろうか! と他愛もない電話。毎日無聊をかこっている身にナマ電話は嬉しい。

語呂合わせには思い出がある。南砺の高落場山は標高 1122m「いい夫婦」と若者に人気が高まっている。この山は冬は山スキー、春は山菜、秋はキノコ採りと年中楽しめる。ブナの自然林で覆われていて 40 年ほど前台風で老木が沢山倒れ、それに茸菌がつき特に多

いのはナメコ、ナラタケ、ムキタケ、次いでクリタケ、ブナハリタケ、珠にシイタケ、エノキタケ、ヤマブシタケ、センボンイチメガサ、マイタケも出ると聞いたが私は見たことはない。これらの山の恵みを頂いていたが倒木は次第に土に還りつつありもう殆ど出なくなった。 会員の T さんを誘って平成 11 年 11 月 11 日キノコ採りに山へ入った。縄ヶ池道と唐木峠との合流点標高 1111m で、ラジウスでラーメン作りランチタイムをとった時は午前 11 時 11 分だった。正に『一』ずくしの晩秋の山歩きを愉しんだ。

昔の山日記などを読み返しながら一日も早いコロナ禍の収束を願っているこの頃です。

(近藤 晋 記)

☆会員動向・他

○支部総会

4月20日に開催する予定です。詳細は別途案内します。

○支部会誌への投稿について

会員の皆様からの投稿を歓迎します。原稿はワード等を利用し MS 明朝 11 ポイントで作成してください。本文は 1 ページを 40 字×40 行とし 1~2 ページ、山行等の原稿には写真を 1~2 枚添付して挿入箇所を指定してください。その他不明な点があれば事務局まで一報願います。

編集後記

懸念されていた新型コロナの第6波はまさに感染爆発の様相を呈しています。そんななかで開催された北京での冬季オリンピック、パラリンピック。スキー、ジャンプ、カーリングなど楽しませてもらいました。しかしパラリンピック前に始まったロシアのウクライナ侵攻が平和の祭典に水をさしてしまいました。戦争のない平和な世界を願わずにはいられません。支部活動が制限される中で山岳古道調査が開始され、会報が2回発行できました。投稿いただいた皆様、会員並びに役員各位のご協力に感謝いたします。 (北田幹夫 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第117号

発行者:鍛冶哲郎 編集者:北田幹夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-303 河合義則方

電話 076-492-3936 090-4326-6197